



きよくり news

CONTENTS

- ・院長の昔ばなし・・・
- ・歴史的潮流の中にもみる
クリニックの現在
- ・一口メモ「セタ」



VOL. 6
2009.7 発行

Muraguchi Kiyomura Women's Clinic

私の昔ばなし、拘りたい「ジェンダー」の話

私の初期研修は1970年4月、坂総合病院で産婦人科医としてスタートしました。ある晩のこと、産直をしていたら、痙攣を起こして妊婦さんが入院してきました。いわゆる子癇発作を繰り返した患者さんでした。一晩中寝ないで治療にあたり、ようやく朝を迎えました。この間私は分娩室に收容した患者さんの元に出たり入ったりをしていたのですが、その母親は私に向かって時折「看護婦さん・・・」を連発して話しかけるのでした。女性はすべて看護婦さんと信じて疑わないのでした。白衣・ユニホームの違いなど、娘の身を案じて必死な母親には「見えても見えず」だったのでしょうか。医者になって駆け出しの私には、『私は医者です』と、とても言えなかったのです。

「医師といえば男性」、そんな時代を駆け抜けてきたことで、私は「ジェンダー」にとっても敏感な人間となりました。有名なジェンダーにまつわるクイズがあります。

Q：父親と息子が交通事故にあい、父親は死亡。重傷を負った息子は病院に担ぎ込まれた。当直の医師は意識不明の少年を急患室に運びながら「おお、神様、私の息子を助けてください」と言った。医師と負傷した少年との関係は？

1999年仙台市が職員啓発のために発行した行政広報物「当たり前の変に気づく」のパンフの1ページにあります。「女性医師4割の時代」に入った今、おそらく正解者は多数、クイズそのものが陳腐になったことでしょうか。時代の流れを感じつつ、タイムスリップしてみました。

4年前、男女共同参画基本計画の改定の際、「ジェンダー」の用語を残すかどうかをめぐり、政府部内で意見の対立が起こり、最終的にはジェンダーは「社会的性別（文化的を外す）」と表現し、「社会的性別は、それ自体に良い悪いの価値を含むものではない」と明記されました。何ということでしょう。ジェンダーは国際的にもすでにコンセンサスをえた概念であり、「男は仕事、女は家庭」といった従来の役割意識を見直し、その反省に立ち、男女共生社会を目指し、21世紀を展望しようとの国際的潮流です。「ジェンダー」は社会的・文化的性別を指す概念であり、同時にそれは男女の間に力の関係が存在すること、つまり権力関係、差別の関係を含意していると理解すべきです。私はまさにそれを身をもって体験してきた、生き証人です。

私は過去16年間、尚絨短・大学で「女性論」「両性論」を担当してきましたが、2年前の最終年の講義を受講した学生が次のような感想を述べました。「自分で動き出さないといけない。ジェンダーを越えることによって自己責任の世界に飛び出すのがすごく不安です。ジェンダーに甘えていたいんです。でもそれでは何も変わらないんですよね。私は変わりたいです。まず女であることに甘えないようにしたいです。・・・」（女子学生）「新たな思想・価値観を国レベルで構想・発展させようと、・・・世界中のあらゆる国々が模索を続けている。日本が将来国際的な流れの中で、いかなる役割を果たしていくかは、このジェンダーに対する取り組みがものを言うだろう・・・」（男子学生）

また、2年前から始まった宮城教育大学の「性・文化・ジェンダーの授業」で私の担当した「人間性と健康、そしてジェンダー」の受講生が次のような感想を述べました。「女性だけが妊娠する仕組みを持つが故に生じる生命と健康のリスクに対し、社会としてのあり方、サポートの仕方がこれまでにいかに手薄なものであったかを感じました。「性の健康」に関しては、男女が共有しなければならない問題ですし、とりわけ女性の肉体的、精神的、社会的な健康を社会全体で守るシステムが必要なのだと思います。・・・」（男子学生）「性と健康面にもジェンダーという問題が深く関係していることが分かった気がしました。・・・世界を見ると妊娠・出産・中絶によりかなりの女性が亡くなっていることもショックでした。妊娠や出産についてもっと女性のほうが決める自由や性生活を選択したり、主体になれる自由や権利が必要だと思いました。」（女子学生）

若さとはすばらしいもの、教育とは明日への力、確かな財産となることでしょうか。時代は刻々、大きく変わりつつあります。10年前「女性に優しい、女性が元気になれるクリニック」を目指し開院しましたが、そこに込めた私の思いの一端を感じていただければ幸いです。

（文責：院長 村口喜代）



長女・長男を連れて

歴史的潮流の中にみるクリニックの現在^{いま}

担当の柴田女史より、「今後クリニックに期待すること」を書いてくれといわれた。しかし、依然として前世紀的な逆流がしばしば渦を巻くこの時、未来を展望するには過去の歴史を確認することが大事という鉄則（やや逃げていますが）という意味で、クリニックの現在がどんな歴史的潮流の中にあるかを探してみたい。

当クリニック開設 10 年の特徴を、部外者の立場から一社会的に見ると一

①若い女性の利用者が多い ②社会的企画に旺盛に取り組んでいる ③相談活動を重視している ④日常の診療活動を素材に調査、分析し世に問う活動が活発である。とまず思い浮かぶ。これらの活動の源泉には、院長の社会を見る眼と旺盛な実証的姿勢にあると思われる。診療以外に大学での非常勤講師（宮教大、尚綱大）の講師活動やリプロでのアンケート、調査分析や、職員による相談活動による情報収集活動などなど。そして、それらが「現代社会のジェンダーとセクシュアリティ」の追求へと前進させてきた。

きわめて短絡的であるが、私の狭い知識でそれらの先進的仕事で思い浮かぶのは、日本で最初の社会的な産児制限運動を行った山本宣治（通称山宣）という東大出身の生物学者である。山宣は 1920 年、同志社大学で日本初の性教育を「人生生物学」として行い、受講生からアンケートを取って当時の若者の性を巡る実態を明らかにした。また、アメリカから来日した M・サンガー女史（米国産児制限会長）を迎え、その講演を元に「山峨女史家族制限法批判」を著し、当時の軍国主義的天皇制国家の強制する「産めよ増やせよ」に苦しむ労働者や貧困層を解放する運動の先頭に立った。山宣は 1929 年、死刑を盛り込んだ治安維持法に唯一人反対した衆議院議員として、東京の宿で右翼の凶刀に倒れた。

その翌年、仙台の産婆多田ミトリによる「産児調節法概要」が出されている。その冒頭には「矢継ぎ早にたくさんの子供が産み落とされ、母体の健康を蝕みつつ、自らも短き命を不幸な闇へと葬られていることでありませう！（中略）斯ふした社会的な事実、その底深く横たわる罪根一社会組織の欠陥とか不合理とか云ふ根本的原因一の徹底的一掃なしにその根本的解決を期しえられないとしても・・・」との述べている。多田は、1928 年に山宣が来仙し演説予定の会場が警察に取り囲まれる中で開会の準備に当たった。猶、多田ミトリは夫が労働運動で逮捕投獄される中で、坂猶興（当時の坂病院院長）の援助で産婆の資格を取っている。

21 世紀の今日でも繰り返される「男中心の論理と文化」の由来は、支配者階級によって作り出され、今日も連綿として引き継がれる。昨今の仙台首長の言動もその臭いがする。さて、先人が命を賭してたたかってきた「産児制限運動」の流れを今日的に「ジェンダーとセクシュアリティ」へとつなぎ発展させた我がクリニックに期待することは、今までのように社会に対する見る目をさらに研ぎ澄まし、共同の輪をひろげる場づくりも今後も続けて欲しいということである。

* 文中の多田ミトリの「産児制限法概要」の存在は、「みやぎの女性史」（1999 年宮城県・女性史研究会）で佐藤和賀子氏により記述されています。（坂総合病院名誉院長 村口 至）

【七夕】にまつわる一口メモ

みなさんは七夕を、どうして“たなばた”と読むのか知っていますか？昔、収穫の無事を祈り、巫女が棚機（たなばた）と呼ばれる機織り機を使って先祖に捧げる衣を織りあげ、神の降臨を待つ禊（みそぎ）の行事があったそうです。この行事と、織姫にあやかって機織りの技や手芸・手習いの上達を願う意味の「乞巧奠（きっこうでん）」が一つになり、現在の形になりました。もともとは7月7日の夕方を表して七夕（しちせき）と呼ばれていたのですが、棚機（たなばた）にちなんで七夕（たなばた）という読み方に変わっていったのです。七夕の由来には、織姫と彦星の恋物語だけでなく、手技（機織・手芸・習字など）の上達や豊作の願いが織り込まれています。そんな話に思いを馳せながら七夕を過ごしてみたいはいかがでしょうか（文責：竹田）



臨時休診

8月13日（木）～15（土）は、お盆休みをいただきます。また、8月28日（金）の午後～29日（土）は、第28回日本思春期学会学術集会参加のため休診となりますのでご了承ください。

編集後記

しとんと降り続く雨の中、紫陽花が美しく咲き乱れる季節となりました。今月号は、院長が子育てに奮闘していた頃の秘蔵衝撃 (!) 写真を第1面に、そして第2面には理事であり夫でもある至先生からのメッセージを掲載いたしました。他ではなかなか手に入らない貴重な資料となっておりますので大切に保管していただければ幸いです（笑）😊

発行元：村口きよ女性クリニック
<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>
 e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp